

概 要 報 告

実施期日	8月5日（火）
部 会 名	中学校 国語部会

研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

テーマ

『書くことにおける協働的な学び』

提案概要

○生徒の実態と課題意識

これまで「随筆」、「意見文」を書く活動はしてきたが、「物語」を書くのは初めてである。単元初めのアンケートによると、学年生徒9割が作文を苦手としており、中でも「題材設定」や「文章の書き出し」、「構成決め」に苦慮していることがわかった。それに対して、「量を多く書くこと」、文法や漢字などの「知識事項」を苦手と捉える生徒は少なかった。与えられた題材があれば、書き進めることはできるが、自分で一から作ることは難しいようである。

○実践の内容

自身の生活を振り返り、取り上げたい「ある日」を選び、物語を創作する。

ア 題材決め

自分の年表を作成することで、物語にふさわしいエピソードを見つけられるようにした。1回目の中間報告の際に年表を共有することで、題材決めのための話し合いが活発になった。

イ 構成決め

「起承転結」を基に、物語の展開を考えた。ある生徒は、初め「不連続きの1日」を淡々と描こうとしていたが、「転」、「結」を考えることで、最後は1日の不幸を覆す幸せな結末になるように工夫し始めた。また、参考文献の内容を紹介した。

ウ 書き出し、表現技法

教科書の教材や図書室にある物語作品から、気に留まった書き出しや表現技法を探し、ワークシートに書き残した。その後、書き残した言葉を学習支援アプリで共有した。

エ 下書き・推敲

ある生徒の場合、1回目の下書きは構成メモをもとに、言葉を書き連ねた。中間交流を経て、2回目の下書きでは表現技法を意識することで、より洗練された表現になった。また、下書きをグループのメンバーと共有し、互いの文章を推敲し合った。

オ 本書き

どの生徒も行動描写の羅列に留まることなく、表現技法を駆使して情景や心情がわかりやすく伝わるように工夫していた。

カ 振り返り

構成や展開について、効果的だったことや、改善した方がよいと思ったことを書かせた。また、書く前の自分と書き終えた後の自分とを比較させた。起承転結の構成を意識することで、以前よりも書き進めやすくなったと振り返る生徒が多かった。

○成果と課題

単元の学習を終えたあとのアンケートによると、約8割の生徒が、「中間交流を経てより良い文章が書けた」と実感していた。交流の中で他の生徒の意見やアドバイスを受けることが、自分の考えを深め、表現を洗練させることに繋がったようである。

一方で、文章力の高い生徒からは、中間交流をすることで逆に進めづらくなったという声も挙がった。このことから、個別の生徒に対する支援の工夫も必要であると感じた。

また、当初予定していた時数よりも多く時間がかかってしまったことも課題である。

協議の柱及び協議概要

協議の柱①：中間交流の実践例

- ・ 中間ではないが、できあがった文章を別視点で推敲しあうことが多い。
- ・ 生徒によってはアドバイスと批判の境目を見定めることが難しい。
- ・ 下書きの交流は書ける生徒によっては必要ない場合もある。
- ・ 中間層には一定の効果はあるが、良いところ探しにとどまってしまいがちである。

協議の柱②：作文指導における工夫・取組み

- ・ 書き始めて躓く場合が多い。真似させたり、パターンから選ばせたりすると良い。
- ・ パソコンやタブレットだと書ける生徒もいる。書き直しや添削もしやすい。
- ・ プレップ法、タプス法など、フレームを教えて書かせる。
- ・ 語彙を増やす、字を丁寧に書く等の基礎がないと書かせるのは難しい。

質疑応答

質問①：中間交流の4人グループはそのときの座席で決めていますか？

回答①：文章力、コミュニケーション能力に応じてこちらで決めている。

質問②：アドバイスを送ることでトラブルが起きたことはありましたか？

回答②：なかったですが、文章力の高い子がアドバイスをもらえない問題がありました。

まとめ概要

本実践は、「どの子どもでも取り組める課題」「正解が一つではない課題」を出発点として構想されたものであり、生徒が自らの経験をもとに物語を創作することに挑戦した。題材選びから構成、表現技法の工夫、本書きに至るまで、生徒が主体的に書く過程を楽しみながら、学びを深められるように配慮されていた。

また、授業内で共有の場を複数回設け、中間交流や学習支援アプリを用いた意見交換を通じて、協働的な学び合いが生まれた。普段の授業でも共有活動は多く取り入れているが、今回は「共有することがどれほど生徒の学びにつながっているのか」という点を改めて意識し、検証する実践でもあった。実際、生徒からは「交流を通じて表現が洗練された」「自分の文章を見直すきっかけになった」といった声が聞かれ、共有の効果が確認された。

一方で、交流が必ずしもすべての生徒にとって有効とは限らず、個別のニーズに応じた支援や、共有の質を高める工夫が今後の課題として残った。また、丁寧に活動を進めたことによって、予定時数を超過した点も見直しの必要がある。

それでも、正解のない問いに向き合い、他者と関わりながら自己の表現を磨いていく中で、書くことの手応えや楽しさを実感する生徒が多く見られた。本実践は、「共有」の意義や方法を問い直す契機となるとともに、協働的な学びの可能性を広げるものであった。